

もっと外の世界と接触を

最近一寸気になっていることがある。私はある NPO の研究会に所属しているが、どのセミナーへ出かけてもほとんど旅行業界の人を見かけることがない。セミナーでは老若男女入りまじり、職業もバラバラで、異業種の社会人が意欲的に自己啓発に取り組んでいる。私は仕事から開放され、毎月 1 度集って学ぶこのような知的サークル内の異業種の人たちとの交流を何物にも代えがたい「智慧の輪」と思い、創造性の研磨と発想の湧出に役立させている。

ところが、「知的」であるはずの旅行業界から他に誰も参加者がいないということで会員の間で不思議がられている。かれらは旅行業に関心があり、私の業務にも興味を抱いて尋ねたり、質問もする。私にとっては得難い経験ではあるが、わが業界人にとっては異業種の人と切磋琢磨する機会を失うことが残念でならない。

「井の中の蛙」から脱却を

これはほんの一例にしかすぎない。一般的に旅行業を含め観光業界の人たちは、同じ仲間同士で群れをなす習性があるようだ。しかし、自分と社会経験や、生活体験が異なる人々との交流、他流試合なしに身内だけの考えや、論理で世の中に伍していけるわけがない。旅行業界人こそは、職業柄異業種の人たちと積極的に接触を図り、異なる業種の人たちとの話し合いや激しい議論を通して奇抜なアイデアや新しい発想を学び取るべきである。かれらがどのように商品造りのヒントを得て、それを商品化するのか、かれらの考えや、智慧、構想力等を学ぶ必要があるのではないだろうか。内にこもって自分たちだけの世界を作っているようでは後退はあっても前進はない。これでは、世間の旅行業界に対する期待にも反していると言えないだろうか。

いま自分の周囲を見回してみてもどれだけの人が自分を磨くために旅行業界以外の人たちと中味の濃い交流を続け、自己研鑽の場を持っているだろうか。外部の人と知り合っただかれらの考え方や、生き方、そしてかれらの輪の中に入り、ともに学ぶことによっていまままで考えられなかった未知の世界へ船出する興奮と感動がわきおこり、向上心を刺激し未来への活力がかきたてられる。外の世界の人たちとの交流は、旅行者にとって最も大切な臨場感に触れる機会をも増やしてくれる。

私は、旅行業界の人たち同士で交流することをとがめているわけではない。ただ、旅行業界人、観光業界に働く人だけが「旅行商売上の生きた情報源」であると思っている「井の中の蛙」的発想があるとすれば、考え違いも甚だしい。自分の足場である旅行業界の人との交流は欠かせないが、同時にもっと広く別の業界に籍を置く人々や、サラリーマンとは違う人たちと話をする機会を増やすことにより、知識面だけでなく、違ったアングルで

ものごとを見るコツをつかみとったり、見えなかったものが見えてきたり、目からうろこが落ちる心境を味わうことになる。

明治維新の志士を見習え！

かつて明治維新の推進力となった若き志士たちは、外の世界への好奇心が旺盛であった。明治の初期に日本を代表して欧米使節団に加わった若きエースは、みな進取の気象に富み、西欧文化を摂取することにも意欲的であった。

旅行業界人にとって最も求められる資質は、内なる向上心と外への好奇心、そしてそれらを消化する貪欲な吸収力であろう。聞けば最近の若者の間には、ものごとを自分の周囲との関係や、自分の視点でしか見ようとしめない傾向が見られるという。いわゆる「巣ごもりタイプ」といわれる現象である。

パソコンと携帯電話の急速な発展と普及が少なからず外界との壁を作り、外の世界から自分を密かに隔離する避難場所を構築してしまうきらいがある。自分ひとりだけの世界に逃避し、外部との接触を絶ち自己陶醉しているときにしか安心できない。こうなっては旅行業者として致命的である。

そうならないためにも日頃から外の世界へ門戸を開き、好奇心と関心を持ち続けることである。そして、業務上であれ趣味であれ、外の世界の人たちとの交流は、直接的な情報の収集というプラス面以上に間接的にコミュニケーションの発生と効用が実生活に張り潤いをもたらしてくれるはずである。業務多忙だけを理由に「井の中の蛙」であってはならない。旅行業界人は大きく世界へ目を向け、「知の狩人、知の旅人」でなければならない。もっと積極的に羽ばたいて外の世界へ飛び出して行こうではないか。